

Glocal Tenri



12

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.12 December 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- 巻頭言
「聖地巡礼」
／井上 昭洋 1
- 文脈で読む「身上さとし」(16)
明治 22 年 3 月～4 月
／深谷 耕治 2
- 英語文献にみる天理教 (7)
D.C. グリーンの『Tenrikyō』(3)
／尾上 貴行 3
- ◁ 音のちから—中国古代の人と音楽 (23)
出土物が語る音の世界—漢代説唱俑の
魅力—
／中 純子 4
- ブラジルの宗教的風景 (2)
ブラジルの宗教と移民②
／中西 光一 5
- ニューヨーク通信 (22)
アメリカ大統領選挙
／福井 陽一 6
- 2024 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』
に学ぶ (10)
第 3 講：135 「皆丸い心で」
／岡田 正彦 7
- おやさと研究所ニュース 8
第 371 回研究報告会 (10 月 21 日)
／新刊紹介／ 2024 年度公開教学講座
のご案内

巻頭言

「聖地巡礼」

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

現在では聖地の意味が拡張されて、宗教性をまとわない「聖地」も存在する。たとえば、甲子園が高校野球の聖地と呼ばれるのは、高校球児にとって一度はプレーしたい特別な場所であるからだ。一方、ロンドンのアビー・ロードの横断歩道や米国ミシシッピ州チューペロのエルビス・プレスリーの生家は、ビートルズやプレスリーのファンが訪れる聖地である。また、テーマパークのディズニーランドもディズニー・ファンにとっては聖地と言って良いかもしれない。これらの「聖地」を訪れることも巡礼と呼ぶことができる。ディズニーランドの場合、訪れた人が目当てとする複数のアトラクションを巡るその様子は、それぞれ前号で紹介した聖地内のミニ巡礼そのものである。

本来、巡礼は聖地を訪れることであるので、「聖地巡礼」という言葉は日本語としてやや冗長な印象を与えるが、昨今この言葉は映画やアニメにゆかりのある場所を訪れることを意味して用いられるようになった。それは経済効果が期待される町おこしのコンテンツとして新たに誕生したものとも言える。女子高生の日常を描いたアニメ『らき☆すた』の舞台となった埼玉県久喜市の鷲宮神社は、アニメ放送前の 2007 年に 9 万人だった初詣客が翌 2008 年には 30 万人に増加し、それ以降の 10 年間の経済効果が約 31 億円と算定される最も成功した“巡礼地”となった。また、映画『君の名は。』の場合、東京・四谷の須賀神社の男坂や岐阜県飛騨市の飛騨古川駅、飛騨市図書館、気多若宮神社など、幾つかの人気スポットがあり、ファンの間で映画の舞台（のモデル）となった場所を巡る「聖地巡礼」がなされる。

聖性を伴った場所に遠方より参詣することが一般的に考えられる巡礼である。それは信仰者が自らの信仰を新たにする宗教的な儀礼行為でもある。一方、「聖地巡礼」は、ある社会集団にとって特別な意味を持つ（しかし、

宗教的な聖性を伴わない）場所を“聖地”と呼び、そこを訪れることを“巡礼”と見なしに行う行為である。形容矛盾になるが、聖性の欠落した俗的な聖地を訪れ、そこで神や仏に祈りを捧げることのない巡礼をするのだ。それはアニメブームに乗った観光産業のなかで繰り広げられる一種の娯楽、消費活動とさえ見なすことができる。このように「聖地巡礼」を捉えると、その行為を巡礼と呼ぶことにある種の違和感を感じる人がいるかもしれない。それはアニメブームのなかで始まった“まがい物”の巡礼であって、宗教儀礼としての“本物”の巡礼とは異なると考えるのである。

しかし、はたして伝統的な巡礼と「聖地巡礼」を比べた時、前者が本物で後者がまがい物と言い切れるのだろうか。八十八カ所の霊場を巡る四国遍路は、21 世紀に入ってから長期的なブームが続いているが、その巡礼参加者は必ずしも熱心に弘法大師の教えを信仰しているとは限らないだろう。むしろ彼らの多くは大師信仰に拘ることなく自分探しの旅として観光も兼ねて霊場を巡っているのではないか。スペインのサンティアゴ巡礼に赴く日本人もみな敬虔なキリスト教徒というわけではなく、海外旅行や巡礼そのものが趣味という人が多いのではなかろうか。そのように考えると伝統的な巡礼も非宗教的な要素を内包しているように思われる。

第 75 番札所の普通寺を訪れた真言宗の信徒が境内で弘法大師の存在を身近に感じ、自身の入定信仰を新たにするという体験と新海監督のファンが須賀神社の男坂に佇み、映画のワンシーンを思い返すという行為は、前者が信仰的な営みであり、後者はアニメブームに乗った一種の観光と捉えることができる。確かに伝統的な巡礼と「聖地巡礼」との間に聖俗の線引きはできるのだが、いずれにおいても巡礼者は自らの思いを確認するために“聖地”を目指すのであり、そのことを考えれば両者は地続きであるとも言えるだろう。

明治22年1月、増野正兵衛ら兵庫眞明組(兵神分教会)は「おさしづ」を通して教会設置のお許しを頂いた。2月9日の清水与之助の身上の障りに関する「おさしづ」や、その前後の正兵衛に対する「おさしづ」に従って、清水が会長となった。教会の場所については、一同が「おさしづ」を仰ぎながら談じ合いを重ねた結果、親神の不思議な守護もあり、村上五郎兵衛の場所と定まった。しかし、まだ正兵衛一家のおぢば移転は果たせていない。正兵衛は度々神戸に帰るが、その滞在が長引く度に身上障りとなっていたようである。明治22年3月からの「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治22年3月7日：清水与之助腹痛みに付願
- ・同日(陰暦2月6日)：兵神分教会の願、東京本局管長の添書を送付相成り、兵庫県へ出願致しますに付、清水与之助、増野正兵衛両名神戸へ帰る事の願/右教会の願書運びに付、橋本清神戸へ出張の儀願
- ・3月17日(陰暦2月16日)：兵神分教会の儀、世界の道速やかに御許し下され、地所の処誠に不思議のように結構に御許し下されましたに付、中井宗七、清水与之助、増野正兵衛の三名講社一統の代りに御礼を申し上げおさしづ
- ・3月26日(陰暦2月25日)：増野正兵衛神戸に帰り居る時から居所悪しく、一昨日より血下り、昨日は頭痛するに付伺
- ・同日：兵神分教会所去る陰暦二十六日地築に付、講社員多人数出て賑々しく致したる御礼申し上げし時のおさしづ
- ・3月31日(陰暦3月朔日)午前9時30分：郡山分教会所に御神楽御道具を御許しの願
- ・同日：兵神分教会所前同様御神楽道具願
- ・4月23日(陰暦3月24日)：増野正兵衛五日前より胸悩み、居所悪しく、南京虫にさゝれし処、おぢばへ出て宜しきに付伺
- ・同日：増野松輔身上おたすけ御礼申上げ、主人先へ職を教えにやるのを、主人が職を知らん故、内へ置きましたものでありますや、又主人方へ其儘置いて宜しきや伺
- ・4月28日(陰暦3月29日)：兵神分教会新築の事に付、所々へ名をかたり行く者ある故、新聞に広告を出す伺
- ・4月：兵神分教会所棟上の願/右に付増野正兵衛婦神の願/同じく清水与之助帰りの願

明治22年3月7日、清水与之助が「腹痛み」について伺うと「一つの心皆受け取るで。皆早く治めよ〜」と諭され、同日、兵神分教会の設立認可に対して「東京本局管長の添書を送付相成り、兵庫県へ出願致しますに付」伺うと、「心置き無う掛かれ。一日も早く掛かれ」と許された。そして、3月13日に、兵庫県知事より認可を受ける。

3月17日、無事認可が下りたこと、教会の場所が村上五郎兵衛のところに定まったことのお礼を中井宗七、清水与之助、増野正兵衛の3名の代表者で申し上げた。「前々より鮮やかと

治めて来てある。皆心通りに成る〜」と述べられ、「人間の順序の理が、神が何かの理を皆受け取るで。生涯のさしづして置く。人が勇めば神も勇むという」と、今回の事だけではなく「生涯のさしづ」として教えの重要な点を諭されている。

この頃、正兵衛は、神戸に滞在すると頻りに身上障りになり、度々「おさしづ」を伺っている。3月26日、「神戸に帰り居る時から居所悪しく、一昨日より血下り、昨日は頭痛するに付」伺った。「案じる事は要らん、案じてはならん。こゝが十分の居所」とおぢばが居所であることを伝えられ、「よう思やんすれば一名は定まれど、一名はどうである。心と心と定め」と、一人だけで心を定めるのではなく、家内一同の「心と心と定め」と諭されている。また、同日、以前兵神分教会の地所を築くために、講社の人が多数ひのきしんに来たことのお礼を申し上げると、「皆心と心を捌いて、だんだん心を洗い合い、心を諭し合い、どんな心も十分一つの理を治め」と、お互いに諭し合っ

て神意を治めることの大切さが諭されている。さて、3月31日、郡山分教会が「御神楽御道具」のお許しを願っている。「道具の理皆許す中一つ元一つ人間始め出したる、これだけぢば一つに限るという事をさしづして置く」と、神楽の道具は、「ぢば一つに限る」と諭された。同日、兵神分教会も同様の願いをすると、「さあ〜理は皆同じ理、つとめ一条鳴物十分の理を許す。第一事情、人間始めた一つ事情、これからこうして貰いたい。こゝよう聞き分けて貰いたい」と、同じように鳴物の使用は許されたが、「人間始めた一つ事情」というおぢばの理の特別さについて諭されている。

4月23日、正兵衛は再び「胸悩み、居所悪しく、南京虫にさゝれし処」と身上の障りについて伺っている。「何程の身上、一つ一日の日、心勇んで治まるまい。治まり一つ事情」と諭されている。おぢば移転の事情を治めるよう諭されているのであろう。また、同日、増野松輔(姉まちの長男)の身上の障りをおたすけ頂いたことへのお礼と、さらに「主人先へ職を教えにやるのを、主人が職を知らん故、内へ置きましたものでありますや、又主人方へ其儘置いて宜しきや」と伺っている。松輔については、明治21年3月11日に「増野松輔足袋職教えるに付伺」と「おさしづ」を伺っており、ここでの「職」もそうしたことに関連しているのであろう。4月23日の「おさしづ」では「さあ〜尋ねる処、何の思案も分かつまい〜。尋ねる処、暫く処じと」とだけ述べられている。

4月28日、兵神分教会の新築に関して、「所々へ名をかたり行く者ある故、新聞に広告を出す」ことについて伺っている。「どういう事、古き処筆に知らせてある」と「おふでさき」についてふれた上で、「何処へどうする成るは年限成り来る。人間の心で成るではない、世界から成り来る。止めようにも止まらん。元々さっぱり分らん処から、世界成る道往還道、どんな事も成る。人間心どうせいこうせいこれ要らん」と、何も無いところから教祖が歩まれた道を示唆し、人間心に基づく小手先の手立てはいらないと諭されている。また、兵神分教会の「棟上の願」については、「談示々々一つ理が一つ。何時なりとも一つ心運んでくれるよう」と諭されている。

前回 (本誌 10 月号) に引き続き、今回は『The Japan Weekly Mail』1895 年 6 月 1 日号に掲載されたグリーン氏の天理教に関する論文『Tenrikyō; or The Teaching of the Heavenly Reason』(天理教一天の理の教え) についての記事を見ていきたい。この記事は、同年 5 月 22 日の午後 4 時から東京の築地で開催された日本アジア協会の例会において、同論文に関してグリーン氏が行った 2 回目の発表の内容をまとめたものである。以下、抄訳する。

グリーン氏はまず、天理教の原典の一つ「みかぐらうた」を聖歌 (the hymns) と称して次のように説明した。この聖歌は聖典の中で唯一印刷されているものであり、その点からしても大変興味深い。これらは「神楽歌」と呼ばれたり、12 の歌があることから単に「十二聖歌」とも呼ばれたりする。修辭表現はほとんどみられず、言葉は洗練されていない。また、リズムにもほとんど工夫はみられないため、韻律的な解釈はできない。しかし、節や句にはある種の調和が見られ、ヘブライ語の詩編 (the Hebrew Psalms) の対句法を思い起こさせる。ただし、似ているのは単に外形だけである。これらの聖歌の言葉は平易であるが、その多くはそのままではほとんど理解できない。しかし、そこには何かしら感銘を与えるような崇高な思想があるように思われる。

そして、グリーン氏は自身で行った聖歌の試訳をいくつか読み上げた後、天理教の教義の説明へと移り、まず神道など他の教えとの関係において次のように説明した。教祖みきの教えは、心学や鳩翁道話と同様に、広く民間に流布している道教に負うところが多い。また彼女は万物には男性と女性の原理が具現化されているとする中国哲学の真理と両部神道と呼ばれる神道の一般的真理を踏襲している。彼女には、新しい一派を始めよう、あるいは伝統的な教えと対立しようという意図がないことは明らかであった。単にこれまで流布している信仰に新たな教えを加えようとしただけであった。

続いて、天理教の神についての説明を行った。教祖みきの教義体系の中心に 10 柱の神がおかれている一方で、礼拝ではテンリ・オー・ノ・ミコトという語句が絶えず繰り返され、人間が忠誠を尽すべき真の対象は月と太陽であるとみきは主張している。彼女の説教における教訓的かつ勧告的な部分では、ほぼ「月日」(月と太陽) という言葉のみが使われているが、これは、マクス・ミュラーが単一神教 (henotheism) と呼んでいるものに、中国哲学と矛盾しない範囲で非常に近づいていったことを示している。実質的に彼女は、自然界において月と太陽また天と地を象徴する、そして人間社会においては夫と妻の関係を象徴するこの 2 神のみを信じていたように見受けられる。これらの神々は人格的属性を有しており、それゆえ人間の心を揺さぶるあらゆる感情を感じることができるのである。彼女は折に触れこれら 2 神は共にすべてのものの根源 (the great First Cause) であると主張していた。しかし、彼女に哲学の知識があったわけではなく、管見の限りにおいては、その二神論は未完成かつ未熟であり、彼女の教えに見

られる一神論 (monotheism) 的傾向を妨げるものではなかった。このことはのちに、信者たちの説教のなかでより明白になっていった。

グリーン氏はこのように、天理教は多神教なのか一神教なのか、あるいはその教えを二神論から理解すべきなのかと議論をした後、教祖みきの教えにおいて興味深い点はほかにもあるとして、神と人間の関係、そして病気治癒について次のように説明した。天理教の教えのなかで特筆すべきは、神々と人間は親子の関係にあるというみきの教えであった。人間は神々の子供であり、親を慕い、とくに苦悩や病気からの救済を求めている。そしてここから信仰治癒の教えが生まれてきたのである。最初、みきは病気の平癒には医者も薬も必要ないと説いていた。しかし、世論の圧力によって徐々にこの点は説示されないようになり、医者や薬にたすけを求める信仰は、奨励されないまでも許されるようになった。また、最初に神がこの世に現れた際にカミオロシが果たした役割という点からすると、現在この教団のなかでそれが実践されている様子がほとんどみられないのは大変奇妙なことに思われる。おそらく、これもまた世論への譲歩であろう。さらに、みきは神の愛 (the divine love) を説くにあたって、この愛というものを決していい加減にうけとめてはいけないこと、そしていかなる宗教的儀礼や行いにおいても心の浄化なしではご利益がないことを人々へ強く戒めていた。

グリーン氏は次に、人間は皆兄弟であるという教えについて解説し、そのうえで教祖の未来観についても言及した。神々は人類の親であるという教えは、必然的に人類の兄弟性 (the brotherhood of man) を導き出す。しかし、この教えはみきよりも、むしろのちに説教者たちによって強調されるようになった。彼らの説くところによれば、天皇は一番年上の兄、一家の長であり、そして人類の親である神々の特別な代表者なのである。そして、これは教えの普遍性を主張することへと繋がっていった。日本人は神々の直系であり、親である神により近い存在であり、世界中のすべての人間は最終的に偉大なる親の存在を知り、大和の社に集まるのである。みきは未来に関しては明言しておらず、将来的に現れてくる恩恵や罪といった状況についてあいまいに述べるに留まっていた。また彼女は、転生理論の真理 (the truth of the theory of transmigration) についても述べているが、この理論によって現生における各個人の責任の意識が弱まることのないように注意を喚起している。

以上が、『The Japan Weekly Mail』1895 年 6 月 1 日号に掲載されたグリーン氏の天理教論文『Tenrikyō』についての報告記事の前半部分である。ここでは、「みかぐらうた」の自身の試訳が紹介されたり、また天理教の神や、神と人間の関係などについて解説されたりしており、天理教の教えの根幹に対するグリーン氏の理解の一端が明らかになっている。次回では、礼拝や布教活動など天理教の信仰実践について発表している同記事の後半部分について見ていくことにする。

出土物が語る音の世界—漢代説唱俑の魅力—

説唱俑とは

前回紹介した漢代の芸芸は現代にも通用する高度なものであった。そのなかには、言葉を使って人を喜ばせる芸もすでに存在していた。以前から筆者が関心をもっていた後漢の墓からの出土俑についてここで述べてみたい。それは鼓をかかえた愛嬌のある男性俑である。中国音楽研究のバイブルともいえる楊蔭瀏『中国古代音楽史稿』（人民音楽出版社、1981年）に、「説唱は漢代にはすでに相当普及していた民間芸術であり、『漢書』卷六八の「霍光伝」に「鼓を撃ち歌唱するを俳優と作す」とあるように、四川から出土した説唱俑がこの語の生きた証といえるだろう」（124頁）とある。四川の説唱俑は、中国古代の民間説唱芸人の代表的な形象とされているのである。



『中国音楽文物大系 四川卷』（大象出版社、1996年、207頁）によると、「俑の高さは56cm、太短い身体つき、頭巾をかぶり、笄かみどめをつけ、上半身は裸で、両肩を高くいからせ、垂れた胸、太鼓のような大きな腹、両腕には玉飾りの装飾をつけ、角ばった長ズボンをはき、はだしで、丸い椅子に座っている。左腕には小鼓を抱え、右手を挙げ、口をあけて笑い、からかうような姿をしている。この俑は、おどけた表情、おおげさな動作で、見事に塑像されている。これは四川で出土した俳優俑のなかでも圧巻である」とある。

修海林・王子初『看得見の音楽 楽器』（上海文芸出版社、2001年、116頁）には、この俑について以下のように解説がある。

「成都の天回山の説唱俑は1957年に四川の成都天回山三号崖墓の石棺から出土した。この崖墓では、石棺一具と瓦棺十二具が出土した。石棺の四壁には朱雀・伏羲・女媧・日月星辰や庖厨（台所）などが彫刻されていた。出土したさまざまな道具のなかで、鉄刀に金象嵌で「光和七年」（184年）と銘文があった。副葬品は陶器が主であり、陶製品で家畜・建物・井戸・使用人や生活用品など生活内容や環境などの諸方面が再現されており、楽器もその一部分である。陶製楽器のなかでは、琴が一件、ほかに説唱俑・排簫俑・撫琴俑・吹竽俑・舞踏俑など十二件があった。この説唱俑は丸い椅子に座って演技した。楽器を演奏する者と並んで舞人と説唱を行う者が、権力者の娯楽のために侍っていた。

俳優とは

いままでも述べてきたが、ここで整理しておく、この説唱俑は、「俳優」という職業の元祖である。日本人がいう俳優とは異なり、戯言ざれごとを言って人を楽しませるものを称した。今の日本のお笑い芸人に近いのかもしれない。俳とは、『説文解字』人部に「俳は戯なり」とある。その段玉裁だんぎょくさいの注では、「其の戯を以て之を言わば之を俳と謂う、其の音楽を以て之を言わば之を倡と謂う、亦た之を優と謂う、其の実一物なり（以其戯言之謂之俳、以其音楽言之謂之倡、亦謂之優、其実一物也）」と、つまるところ俳も倡も優も、人を楽しませる点では同じで、俳も優も同義と考えていい。『史記』滑稽列伝には、俳優の優旃ゆうせんについて、「優旃なる者は、秦倡侏儒なり、善く笑語を為し、然して大道に合す（優旃者、秦倡侏儒也、善為笑語、然合於大道）」とある。別の俳優の注（索隱）には、「案ずるに、優は、倡優なり……旃は其の字のみ、……旃は秦に在る者なり（案、優者、倡優也……旃其字耳、……旃在秦者也）」とある。この侏儒とは、小人のことをいう。この

戯言を用いて人を楽しませる俳優は、小人であることもあったらしい。時には自分の身体的特徴も利用して、権力者を戯言で楽しませるのが俳優であったのだろう。四川の有名な説唱俑（『中国音楽文物大系 四川卷』（208頁）の画像をもう一つあげてみたい。

1963年に四川の郫縣宋家林の後漢の墓から出土した高さ66.5cmのこの説唱俑について、李建民『中国古代理遊藝史』（東大図書公司、1993年、170頁）には、「歪んだ口、曲がった両足、奇形の身体つきが冗談ばい表情と重なり、とても生きいきとしている」とある。顔をしかめて、自分の身体の短所をさらけ出し、可笑しみを演出し、いきいきと当時の様を今に伝えてくれる。漢代の四川



上に紹介した説唱俑二体は、後漢のものというだけでなく、四川の成都付近からの出土という共通点もある。そこには豊かな文化的営みがあったことを、これらの出土物は語ってくれる。

蜀と呼ばれた四川西部からは、漢代に著名な文化人が多く輩出した。『文選』（卷4）に収録された左思さし「蜀都の賦」では、蜀の文化程度の高さを誇り、前漢の武帝に辞賦の才を見出され、宮廷文学の方向を決定づけたとされる司馬相如しほしやうじよ（B.C.179?～B.C.117?）や、学者・思想家としても知られる揚雄ようゆう（B.C.53～A.D.18）の名が挙がる。しかし、前漢よりも後漢において、さらに文化的発展がみられた。中林史朗『中国中世四川地方史論集』（勉誠出版、2015年）に、益州出身者が中央政界における一勢力へと成長して来ると述べられている（107頁）。益州とは漢代におかれた州名で、蜀と同地域を指すが、権力者の都への往来を通じて都の文化が益州にも多くもたらされたことは十分推測可能である。漢代の四川の音楽文化も、都のそれに倣うとすると、綱渡りなどの演技や動物戯なども含む「百戯」や俳優文化が流入していたことは納得できる。先の説唱俑が出土した成都天回山三号崖墓は、岷江沿いの崖に作られた墓で、崖墓という埋葬形式は四川にとりわけ多いものだという。川沿いの険しい崖に作られたのは如何なる階級の者の墓か知る由もないが、説唱俑のほかにも、排簫俑・撫琴俑・吹竽俑・舞踏俑など十二件が出土していることからして、都の文化にも精通した文化人の墓だったと推測される。

説唱俑の魅力

説唱俑はなぜ鼓を抱えていたのであろうか。吉川良和『中国音楽と芸能』（創文社、2003年）第7章「説唱音楽」には、現代の説唱者について、説唱は、「聴衆にテンポやリズムの変化をつけることで、より深い味わいと厭きささない工夫をしている」（256頁）とある。また、説唱者は必ず打楽器を手にする（259頁）という。打楽器のリズムにのせた戯言の、その調子のよさに魅了される人間の感覚は、古今東西共通しているのかもしれない。蘇州の評談のような現代の説唱者は、ほかの楽器演奏者に伴奏をさせることもあるが、先の説唱俑とともに楽器を奏する楽人俑が出土したことから、漢代でも他楽器の伴奏をまじえた賑やかな説唱が行われていたようである。このいきいきとした後漢の説唱俑は、鼓のリズムによって調子よく物語る芸人の息吹を感じさせると同時に、もしかしたら漢代の芸能文化も今とさして変わらぬものだったかもしれないとの想像を我々に抱かせる。

アメリカ合衆国の出移民

なぜアメリカ南部の白人はブラジルへ移住したのか。従来の研究では、プッシュ・プル理論を通じて、彼らの移住の送り出し要因（プッシュ要因）と受け入れ要因（プル要因）を明らかにしている。プッシュ要因としては、南北戦争（1861年～1865年）における南部連合の敗北、黒人奴隷制の廃止、白人至上主義社会の崩壊などが挙げられる。一方、プル要因にはブラジル社会の「白人化」政策や黒人奴隷制の存続、綿花生産技術の導入などがあり、その主な研究としては Dawsey (2005) や Oliveira (1995) などがある。

実際、アメリカ合衆国の移民研究においては、「シカゴ学派」（シカゴ大学社会学部）をはじめとする入移民 (immigration) に関する実証的な研究が多いが、出移民 (emigration) に関するものは少ない。この点、出移民に関する研究を進めた Dawsey らの学術的功績は大きいとされている。

しかし、19世紀の合衆国には南部白人以外の出移民の事例も存在しており、これには奴隷制時代の黒人奴隷が関与している。管見の限り、最も有名な事例はアフリカ西海岸のリベリア (Liberia) への入植ではないだろうか。南北戦争以前、合衆国では自由黒人の国外移住運動がアメリカ植民協会 (American Colonization Society) によって推進され、1820年から1864年の間に約11,000人の黒人がリベリアに移住した。そして、彼らは1847年にアフリカ最初の独立国家であるリベリア共和国を建国した。その他、逃亡奴隷を助けた秘密結社「地下鉄道」(Underground Railroad) を通じて、数万人の黒人が自由を求めてカナダに渡り、1849年にはオンタリオ州のバクストン居住地を建設した。

このように、白人と黒人のアメリカ人は、それぞれ新天地を求めて自国をあとにしたが、強調すべき点は、両者の移住のきっかけには奴隷制が大いに関係していたということである。黒人は、奴隷制が廃止されているか、もしくは存在しない地に移住した一方、白人は、単一栽培と奴隷制を基盤とする大土地所有制が維持されている地に移住したのである。

新大陸における黒人奴隷制

そこで、黒人奴隷制についても触れておきたい。新大陸における黒人奴隷制の歴史は、大航海時代にまで遡ることができる。奴隷制は、大西洋奴隷貿易（ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ大陸を結ぶ三角貿易）の重要な一角を担っており、その構図は次のようになっていた。ヨーロッパ（ポルトガル、スペイン、フランス、オランダ、イギリスなど）からは武器や工業製品がアフリカに輸出され、アフリカからは黒人奴隷がアメリカ大陸（主にアメリカ南部、ブラジル、カリブ）に輸出された。そして、アメリカ大陸からは砂糖、金、コーヒー豆、綿花などがヨーロッパに輸出された。実際に、ブラジルは1535年から1888年にかけて500万人以上の奴隷を輸入し、アメリカ大陸で最も多くの奴隷を輸入した国であった。

また、従属的な社会構造の中で採用され続けてきた黒人奴隷制は、長い征服と植民地化の歴史の産物であった。ここでは、

筆舌に尽くしがたい奴隷制の残虐さについて詳述しないが、社会学者のオリバー・コックスは奴隷制の歴史に着目し、ギリシャ、ローマ、アメリカ南部、カリブ、ブラジルの奴隷制の特徴に注目している。彼は、今日に至るまでくり返し問題となっている「人種差別」の元凶は、新大陸の黒人奴隷制にあると主張している。なぜなら、ギリシャやローマでは主に戦争捕虜が奴隷となり、その人種や民族、階級は多様であったが、アメリカ南部やカリブ、ブラジルでは主に黒人が奴隷労働に使役され、黒人種をターゲットにした人種主義的な性質を持っていたからである。

南北戦争と黒人奴隷の解放

このような歴史的・社会的コンテクストのなかで、南部人移民は黒人奴隷制を擁護し、白人至上主義的な思想を信奉していた。それでは、なぜ彼らはブラジルに移住する必要があったのであろうか。その理由は、南北戦争における南軍の敗北にある。

南北戦争はアメリカ史上最大の戦争で、黒人奴隷制を否定した北部と、それを肯定した南部との内戦であった。1861年4月12日、南軍によるサムター要塞砲撃によって開戦し、その後4年間の激戦を経て、1865年4月9日のアポマトックス・コートハウスの戦いで北軍が勝利を収め、南軍最高司令官のロバート・リーが降伏して終戦を迎えた。その結果、南部は北部の支配下に置かれ、1877年まで続く社会的・政治的な再建時代 (Reconstruction Era) が始まった。この期間、南部は劇的な変化を経験した。

まず最も顕著な変化は、黒人奴隷の解放であった。リンカーン政権が発布した1863年1月1日の奴隷解放宣言により、約400万人の奴隷が解放された。その後、ジョンソン政権下で「合衆国憲法第14修正」が1868年7月9日に成立し、アフリカ系アメリカ人に市民権が与えられた。そして、グラント政権下では「合衆国憲法第15修正」が1870年2月3日に成立し、彼らに選挙権が付与された。これにより、アフリカ系アメリカ人の基本的人権が認められることとなった。この変化を契機に、アフリカ系アメリカ人の一部は南部の政治に参加できるようになり、再建期には16人が連邦議員に選出され、1人が州知事、6人が副知事に選ばれた。一方で、南軍に従軍した白人は選挙権を失い、白人を中心とした南部社会は衰退の一途を辿った。そのため、南部社会の終焉を予感した一部の南部人は、奴隷制が存続していたブラジルへ移住することを選んだのである。この移住の過程については、次号で詳しく見ていきたい。

[参考文献]

- James M. Dawsey. *Americans – Imigrantes do Velho Sul no Brasil*. Piracicaba: Unimep, 2005.
- Ana Maria Costa de Oliveira. *O Destino (não) Manifesto: Os Imigrantes Norte- Americanos no Brasil*. São Paulo: União Cultural Brasil Estados Unidos, 1995.
- Oliver C. Cox, *Capitalism as a System*. New York: Monthly Review Press, 1964.

アメリカ大統領選挙

いよいよアメリカ大統領選挙の日がやってきた(11月5日記)。4年前の大統領選挙では、連日双方の支持者同士の衝突や警察隊との衝突が発生し、多数の逮捕者が出る事態となった。今回はそれを警戒して、投票所周辺や投票用紙保管倉庫などの警戒警備が強化されている。どちらの党が敗れたにしても抗議の暴動が起こるような気配があり、街には緊張した空気が流れている。在ニューヨーク日本国総領事館からも選挙関連施設や人が多く集まる場所にはなるべく近づかないなど、不測の事態に巻き込まれることのないように注意勧告が出されている。

この原稿が出る頃には選挙も終わり、既に結果が出ているかもしれない。あるいは、選挙結果に納得がいかず多数の暴動が発生しているかもしれないが、今回の選挙の特徴を考えてみたい。今までの選挙が共和党(保守)と民主党(リベラル)との戦いであったとしたら、今回は全く異なり、グローバリズム対反グローバリズム(または愛国主義)の対立軸で選挙を見る必要があるように思う。

世界がグローバリズムを新しいスタンダード(価値基準)として採択し、国境を超えた明るい未来を確約する魅力的な響きを醸し出し進んできた。民主党のバイデン・ハリス陣営はそれを継承し、国際協調に重きを置き、大勢の移民を歓迎し、ウクライナ戦争やイスラエル戦争を支援してきた。女性の中絶の権利を保護し、再生可能エネルギーの利用を積極的に促している。アメリカ初の女性大統領としても期待されている。

しかし、明るい未来とは裏腹に、紛争や戦争が勃発し、大企業による市場の独占や貧富の格差の拡大する中、国際社会におけるアメリカの地位はどんどん凋落し、経済は疲弊し、アメリカの愛国心や伝統、宗教までもが否定される方向に進んでいった。それに対抗して、もう一度古き良きアメリカを復活させたいという反グローバリズムの立場をトランプ陣営は取っている。

反グローバリズム政権の主張は、反移民、ウクライナ戦争支援反対、減税などである。8年前にトランプ政権がこの反グローバリズム政治を行って、ある程度成功を収めた。今回、共和党のトランプ陣営には、民主党の象徴とも言えるケネディー家のロバート・ケネディ Jr. やもともと民主党支持者だったイーロン・マスクなどの著名人が加わり、反グローバリズムの勢いが強まっている。ヨーロッパの各国でも同様の反グローバリズム政党が誕生しており、世界的な潮流となりつつあるように思う。それは、日本にも影響してくる可能性があると思われる。

講社の誕生

そのような激しいせめぎ合いの中、大統領選挙の前日11月4日に、天理教の講社がニューヨークの山前真生さん宅に誕生した。山前さんは10年前に婦人会本部の人材派遣生としてニューヨークセンターに着任。女子青年をつとめながらニュー



講社の開設 山前真生宅

ヨーク天理文化協会日本語を教えた。2年間の派遣期間終了後もニューヨークに留まり、引き続き日本語を教えながら、布教活動に従事した。10年の活動が実り、この度、所属の麴町大教会久保一元会長により、講社の鎮座が行われた。このような激動の旬の中に、天理の参り所の誕生に心から喜びを感じた。今から63年前の1961年、久保会長の祖父にあたる久保正徳麴町大教会5代会長が若い時に、2代真柱の御命を受けて、約3カ月かけて世界中を巡り、その時にニューヨークの街も一人で歩いたようだ。先代の熱い思いと種まきのお陰で今日の講社の開設に繋がったのかもしれない。山前さんの日本語の教え子であるピーター・ギボンズさんも入信し、おぢばで修養科と教人資格講習会を終え、フロリダに講社を開設している。婦人会本部の人材派遣プロジェクトをきっかけに、このような人材を派遣していただいた婦人会本部のご尽力に、この場をお借りして心からお礼を申し上げたい。

同じ時期にもう一つの喜びがあった。以前文化協会日本語講師を務めていたマシウク(旧姓岡野)聖子さんの夫フェルナンドさんが、先月10月26日のお運びでアルゼンチンにあるブエノスアイレス教会の3代会長に就任した。マシウク聖子さんはニューヨークでの勤務を終了後、アルゼンチンに渡り、日本語教室を開講。日本語教室を通してフェルナンドさんと知り合い、結婚した。そして、聖子夫人の丹精の下、フェルナンドさんは、ようぼく、布教所長を経て今回会長就任の運びとなった。これからのフェルナンド夫妻の活躍が楽しみである。

現在のグローバリズムと反グローバリズムのせめぎ合いが続く中、まだまだ微力ではあるが、一れつ兄弟姉妹が互いに立て合いたすけあう陽気ぐらしの姿を伝える天理教の拠点が増えていくのはとても喜ばしいことだ。長い道のりになるかもしれないが、教祖から教えていただいた陽気ぐらしの生き方こそが、世界のスタンダードとなり、世界を平和に導き治めていくことのできる生き方であると思う。その日が来るのを楽しみに、まずは身近な人から世界の人々へ繋がっていくように、今後の活動を進めていきたいと願っている。

第3講：135 「皆丸い心で」

天理大学人文学部教授
岡田 正彦 Masahiko Okada

今回の公開講座では、次の逸話をもとに「丸い心」について考えてみました。

一三五 皆丸い心で

明治十六、七年頃の話。久保小三郎が、子供の楢治郎の眼病を救けて頂いて、お礼詣りに、妻子を連れておぢばへ帰らせて頂いた時のことである。

教祖は、赤衣を召してお居間に端座して居られた。取次に導かれて御前へ出た小三郎夫婦は、畏れ多さに、頭も上げられない程恐縮していた。

しかし、楢治郎は、当時七、八才の子供のこととて、気がねもなくあたりを見廻わしていると、教祖かたわの側らに置いてあった葡萄が目についた。それで、その葡萄をジッと見詰めていると、教祖は、静かにその一房をお手になされて、

「よう帰って来なはったなあ。これを上げましょう。世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸い心で、つながり合うて行くのやで。この道は、先永う楽しんで通る道や程に。」

と、仰せになって、それを楢治郎に下された。

*

この逸話に登場する「久保小三郎」は、明治17、18年頃に長男・楢治郎の目の障りをたすけられて入信しました。さまざまところで引用されるこのエピソードは、入信間もない小三郎の家族が教祖のもとを訪れたときの逸話です。当時、奈良市山間部の田原地区周辺にはいくつかの講社も結成されていました。久保小三郎は、明治19年にこの地域の信仰者をまとめた講社が結成された際に講元となります。さらに講社の寄り処の普請とともに教会設置を出願し、明治23年に田原支教会が設置されると、その初代会長に就任しました。

逸話のなかで葡萄をジッと見つめていた久保楢治郎は、明治11年に久保小三郎、ナラエの長男として出生します。逸話にあるように、幼少の頃からお屋敷の人々と慣れ親しんだ楢治郎は、明治26年に本部青年となり、大分や栃木へ布教に赴くなど、青年期から一貫して、熱心に道のうえに尽くす生涯を送ります。明治42年に、父である初代会長の跡を継いで田原分教会の2代会長に就任してからは、教区活動や教会の運営に力を注ぎました。幼少期から一貫して、お道に尽くし切ったその生涯をみると、教祖が幼い楢治郎におかけになった「この道は、先永う楽しんで通る道や程に」というお言葉が、より深く心に沁みてきます。

*

また、この逸話のなかで印象に残るのは、やはり教祖の側らに置いてあった葡萄でしょうか。江戸時代から葡萄は、建物の日陰樹として広く栽培されていたようですが、明治10年代には大阪の柏原市や藤井寺市のあたりで「甲州ぶどう」の本格的な栽培がはじまり、この地域の主要な産業の一つになりました。明治16、17年頃の中山家には、河内方面の人々が多く出入りしていましたので、この逸話に登場する葡萄は、現在の甲州ぶどうに近い立派なブドウであった可能性は高いでしょう。ジッと見つめていたくらいですから、それなりに大きな実がついていたのではないのでしょうか。

たぶん、当時の子どもにとっては高級品と言えそうな葡萄の房を手渡しながら、教祖は「世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸

い心で、つながり合うて行くのやで」という、印象的なお言葉を仰せになります。特別なシチュエーションで記憶に刻まれた言葉は、しばしば人生のさまざまな局面で人々を支える力になり、人生を支える金言になることがあります。このとき教祖が仰せになったお言葉は、お下げいただいた葡萄の房のイメージとともに、幼い楢治郎の心に深く刻み込まれたのではないのでしょうか。

*

また、このとき教祖が仰せられた「丸い心」とは、いったいどのような心のあり方なのでしょう。三原典（「おふでさき」、「みかぐらうた」、「おさしづ」）には、「丸い心」という表現は見当たりません。『天理教教典』にも使われていない表現です。その一方で、仏教の法話や倫理的な徳目を説く文章では、しばしば使われる表現の一つです。その場合は、四角や三角にあるカドやとがった突起の無い丸い心は、他者との軋轢を生じず人を傷つけない、といった意味になることが多いようです。

この逸話では、幼い子どもがジッと見ていた葡萄の房を手渡しながら、教祖は人間世界の理想のあり方をやさしく説かれています。丸い葡萄の粒がつながり合って、一つの葡萄の房をつくるように、一人ひとりの人間が「丸い心」でつながり合う世界。このあたりは、一般的な表現の「丸い心」と共通するところがあるように感じます。

原典に参照できないこのお言葉の意味は、このとき手渡された葡萄の房と切り離して考えるべきではないでしょう。「世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸い心で、つながり合うて行くのやで」という教祖のお言葉を考えるとき、やはり葡萄にたとえられた「丸い心」は、この世界／社会を構成する人間一人ひとりが理想とすべき、心のあり方について説かれた言葉なのだと思います。そして教祖は、この未来のビジョンをこれからの時代に生きる、幼い子どもに対して示していることを忘れてはならないでしょう。

*

かつて、近代日本の著名な思想家である丸山眞男は、戦後の日本社会の再生のために、「である」論理・「である」価値の社会から、「する」論理・「する」価値の社会への移行を強調しました。戦後の日本社会は、基本的に成熟した近代社会の実現を目指してきました。その一方で、物質的には豊かになったが「無縁社会」といった殺伐とした言葉が人口に膾炙し、システム化した無機質な社会において人と人との絆が希薄化するなかで、かつての日本社会における濃密な人間関係を懐かしく感じる人も少なくないでしょう。

前近代の地縁・血縁が支配する社会は、自由な意思にもとづく自己実現を認めない制度化された相互扶助の社会であり、個人の自由は厳しく制限されていました。イメージ化するならば、数珠玉のような人と人とのつながりです。しかし、教祖が未来のビジョンとして示された葡萄の房の一粒一粒は、身動きの出来ない数珠玉のように互いを結び付けるのではなく、皆それぞれに個別の軸を通して枝から木の幹につながることによって、はじめて身(実)を寄せ合っています。

一人ひとりの個性と自立は尊重しながら、存在の根源を共有することによって、人々が互いに寄り添い合う世界。教祖が示した理想の世界のイメージは、伝統的共同体の解体と近代社会の矛盾に直面して、方向性を見失いかけている現代社会の未来に、極めて明確な指針を示すものではないのでしょうか。

第 371 回 研究報告会 (2024 年 10 月 21 日)

「ブラジルにおけるプロテスタント系学校の設立と展開—コ
レージオ・ピラシカバーノを事例に—」

中西 光一

本報告では、19 世紀のブラジルにおけるプロテスタント系学校の
設立目的に注目し、コレージオ・ピラシカバーノの教師マーサ・
ワッツの書簡を通じて、彼女の宗教観を検証した。まず、学校設
立の目的として、米国南北戦争後の南部人移民の支援、移民子弟

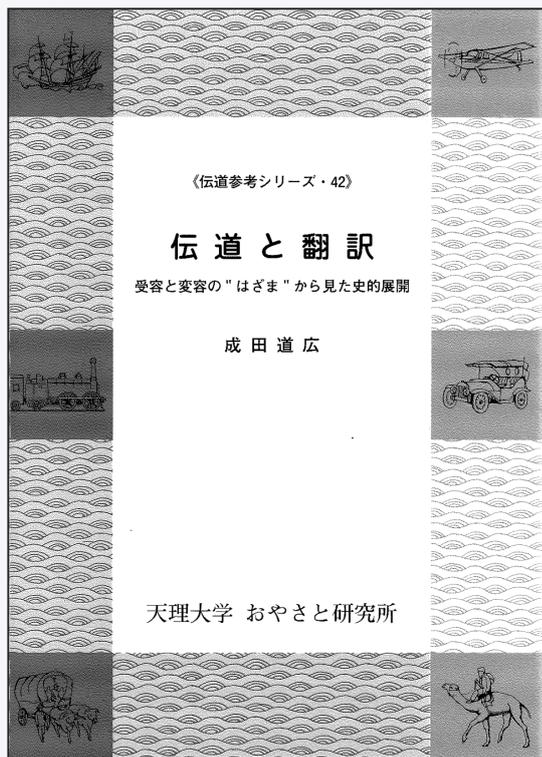
への教育提供、そして米国式の民主化・文明化の推進があったと
説明した。次に、ワッツが解放した女性奴隷フローラ・ブルーメ
ルの事例を通じて、ブルーメルの解放には米国のフェミニズム思
想が影響していたことを明らかにした。最後に、ワッツは宗教活
動と並行して女性の解放や奴隷制廃止を支持し、彼女の伝道活動
にはフェミニズムの影響が色濃く表れていたと結論づけた。発表
後、参加者からは米国系プロテスタント教会が運営する大学、女
性解放、移民問題、宗教に関する質問が寄せられ、活発な議論が
行われた。

新刊紹介

成田道広著『伝道と翻訳 受容と変容の"はざま"から見た
史的展開』(伝道参考シリーズ 42)を刊行しました。

内容の詳細に関しては研究所のホームページ (<https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>) をご覧ください。

伝道参考シリーズは、道友社販売所で購入いただけます。



『伝道と翻訳 受容と変容の"はざま"から見た史的展開』

2024 年度公開教学講座の ご案内

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ (10) —

2024 年度の公開教学講座は、以下の日
程でオンライン配信しています。

- 第 1 回 6 月 井上昭洋所長
172 話「前生のさんげ」
- 第 2 回 7 月 澤井真研究員
114 話「よう苦労して来た」
- 第 3 回 9 月 岡田正彦研究員
135 話「皆丸い心で」
- 第 4 回 10 月 八木三郎研究員
36 話「定めた心」
- 第 5 回 11 月 森洋明研究員
85 話「子供には重荷」
- 第 6 回 1 月 中西光一研究員
144 話「天に届く理」

グローバル天理

第 25 巻 第 12 号 (通巻 300 号)

2024 年 (令和 6 年) 12 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所 (HP)



印刷 天理時報社

Printed in Japan